

平成30年度 地域貢献活動支援報告書

地域イノベーション推進機構長 殿

所 属 地域拠点サテライト東紀州サテライト
氏 名 山本康介

活動テーマ	東紀州サテライトを拠点とした熊野地域の小中高の児童・生徒に対する「木育」プログラムの開発と実施
実施期間	平成30年 5月 1日 ～ 平成31年 3月31日
活動内容	<p>(1) 具体的な活動実施内容</p> <p>熊野地域の小中高の児童・生徒を対象とした「木育」プログラムを計画し、地域の「熊野林星会（以下、林星会）」とともに実践する。昨年は、伐採された木が運ばれ、取引される原木市場と、それらを加工する製材業の木育プログラムとして、木育ゲームを行い、その後原木市場、地元製材所を見学した。今年度は、製材所で加工された木材が、建物になりユーザーに届けられるまでの過程を学ぶためのプログラム「みんなで鶏舎をたてよう！」を計画・実施した。このプログラムは、地元の一級建築士設計による日本古来の軸組工法の解説（図1）と、それを地元大工指導のもと施工体験（図2）するプログラムで、同時に、鶏の餌箱作り（図3）と、カップ大会（三重県）を実施した（図4）。</p>  <p>図1 一級建築士による日本の伝統的木造建築手法の解説</p>



図2 地元大工による建築実演と児童見学の様子



図3 餌箱作り体験



図4 集合写真

(図1～4は撮影者全員に大学HP等への掲載に対し同意を得ています)

(2) 地域への貢献（地域の発展・活性化への寄与、広がり）

熊野地域の林業を担う人材の育成、自然と人間の共生を図り地域社会の持続的発展に寄与することができる人材の育成を通じた、当該地域の主要産業である林産業の涵養が期待できる。昨年度実施した、ゲーム（三重大学と熊野林星会の共同開発）と現地視察を融合したプログラムは注目度が高く、伊賀白鳳高校での出張授業が実現した。熊野地域全体を巻き込んだ活動に発展しており、当該地域における業界内の認知度は高い。“地域教育”としての木育プログラム構築を地域の人々の手で実現しようという気運が高まっている。

(3) 共同実施者との連携状況

本活動は、毎年の恒例イベントとして各所で認知されており、継続性が高い。熊野地域全体での“地域教育としての木育”を、産学官民連携体制で実施するためのキックオフにあたる会議を平成31年1月9日に実施し、当該地域における木育活動の集約と情報交換の継続で一致した。行政、教育委員会の注目度も高く、目的達成に向けて多くの組織・人々が主体的に参加している。

(4) 大学の教育・研究成果のかかわり

申請者および三重大学生物資源学部・坂本竜彦教授を中心に、当該地域で3年前から木質バイオマスの地域利用に関する研究を継続しており、木質バイオマス利用の大前提となる地域の林業およびその関連産業の振興のため、当該地域の若者（小中高生）を対象とした活動を継続している。今年度より、木育（森林環境教育）に関して日本森林学会をはじめとする学术界と三重県で活躍する、教育学部平山大輔准教授に参画いただき、木育の効果等の学術的な裏付けを行なっていく体制を構

築した。

(5) イベント等開催実績 (名称, 実施場所, 参加人数等)

今年度の木育イベントは以下の通り実施した。

イベント名称: 伊賀白鳳高校「セーザイゲーム」出張実施 (図5)

実施場所: 伊賀白鳳高校、廣島製材、伊賀マルタピア

参加人数: 生徒8名、本学学生2名、その他約20名、計約30名。

イベント名称: 第3回熊野木育プログラム「みんなで鶏舎をたてよう！」(図6-8)

実施場所: NPO 法人あそぼらいつ

参加人数: 児童40名、その他約20名、計約60名。

(図5-8の著作権は新聞社にあります)



図6 みんなで鶏舎をたてよう新聞記事 (中日)



図8 みんなで鶏舎をたてよう新聞記事（ヨシクマ新聞）

(6) これまでの取組みによって得られた具体的な成果について

※継続4年目以降（認定）の活動については、これまでの継続した取組みによって得られた具体的な成果について記述願います。

昨年度の取り組みが評価され、地元木本高校の参加と、熊野市での当初予算化検討、熊野地域全小中高等学校や地域外（伊賀白鳳高校）への水平展開と広がっている。活動メンバーの士気が高く、熊野地域全体で“地域教育としての木育”活動となるような仕組みづくりを協議している。